姫路市埋蔵文化財センター調査報告第22集

丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書

平成25年(2013年)

姫路市教育委員会

序

姫路市内には、現在約1,200ヶ所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため、埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究、展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。

この度発掘調査を実施しました勝原区丁は、瓢塚古墳をはじめとする古墳が数多く存在し、「播磨国風土記」には大田の里として登場するなど、播磨の歴史を語る上で欠かすことのできない重要な地域です。

なかでも、丁・柳ヶ瀬遺跡は、市内を代表する集落跡として注目を集める遺跡です。その歴史は長く、古くは縄文時代から現在に至るまで連綿と人々の営みが続いてきました。この度の調査成果は、地域の歴史に新たな発展をもたらすことと存じます。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました株式会社フィットライフ近畿、その他関係各位のご尽力に心より感謝を申し上げます。

平成26年（2014年）3月
姫路市教育委員会
教育長　中杉隆夫

目　　次

序
目次・例言・凡例

第１章　調査に至る経緯と調査地の位置 …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査地の位置と周辺の遺跡 …… 1
第２章　調査の成果 …… 2
　１．調査の概要 …… 2
　２．弥生時代から古墳時代の遺構 …… 4
　３．古代の遺構 …… 10
　４．中世の遺構 …… 12
第３章　総括 …… 12

例　　言

1. 本書は、兵庫県姫路市勝原区丁字堂垣内451番１他に所在する丁・柳ヶ瀬遺跡（遺跡番号：020327）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社フィットライフ近畿からの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。
3. 本発掘調査（調査番号：20130282）は、姫路市埋蔵文化財センター小柴治子、関梓、玉越綾子が担当した。また、確認調査は、小柴治子が担当した。（調査番号：20130191）
   調査の体制は以下の通りである。

教育委員会事務局	教育長	中杉隆夫	埋蔵文化財センター	館長	秋枝　芳
	教育次長	林　尚秀		係長	森　恒裕
	生涯学習部長	小林直樹		主事	嶋田　祐
	文化財課長	福永明彦		技術主任	小柴治子
	文化財課係長	大谷輝彦		技師補	関　梓
	文化財課技術主任	福井　優		嘱託職員	玉越綾子

4. 整理作業及び報告書の作成には、以下の職員の協力を得た。
   黒岩紀子、香山玲子、清水聖子、田中章子、玉越綾子、寺本祐子、野村知子、藤村由紀、三輪悠代
5. 本書の執筆・編集は、小柴、関がおこなった。

凡　　例

1. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
2. 土層名は、『新版標準土色帳』（1999年度版）に準拠した。
3. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
   ピット→SP、井戸→SE、溝→SD、竪穴建物跡→SI、掘立柱建物跡→SB　自然流路→NR
4. 本書で使用した土師器の器種名及び年代観については、長友朋子編　2007「弥生土器集成と編年－播磨編－」に準拠した。ただし、不確定な個体については、器種の細分を行わなかった。
5. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。

第１章　調査に至る経緯と調査地の位置

1．調査に至る経緯

姫路市勝原区丁において、株式会社フィットライフ近畿による宅地造成工事が計画された。当該地は、丁・柳ヶ瀬遺跡（遺跡番号：020327）の範囲に所在している。このため、平成25年（2013年）8月3日、工事予定地内に2×1.5mの試掘坪を5箇所設定し、確認調査（調査番号：20130191）を実施した。

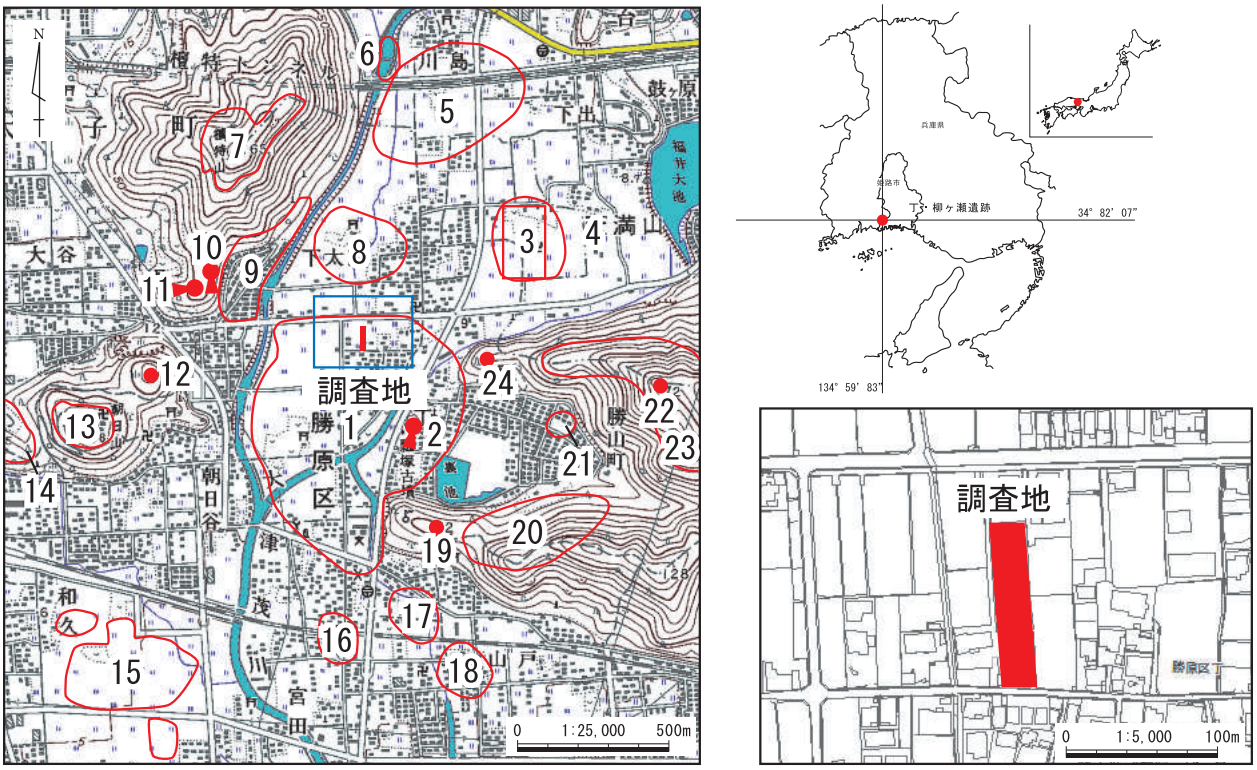
その結果、弥生時代から古墳時代の遺物を多く含む堆積層、古代及び中世の遺構を検出し、遺跡が良好な状態で残されていることが判明したため、本発掘調査を実施することとなった。

調査期間は、平成25年（2013年）9月30日～10月19日である。

調査は株式会社フィットライフ近畿の委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。

2．調査地の位置と周辺の遺跡

調査地は、縄文時代から中世の集落遺跡である、丁・柳ヶ瀬遺跡の北端に該当する。市内の遺跡の中でも、存続時期の長い複合遺跡として知られ、大津茂川下流域の拠点的な集落の一つと位置づけられている。遺跡の範囲内に、古墳時代前期の前方後円墳である瓢塚古墳が所在し、周辺の山上にも前期古墳が集中している。また、8世紀に編纂された「播磨国風土記」大田里の項には渡来人の記述がみられ、それを証明するかのように、埋葬施設が穹窿式の横穴式石室である丁山頂古墳や、7世紀半ばが創建時期とされる下太田廃寺など、渡来人と関わりがうかがえる遺跡も数多く所在している。このほか、丁・柳ヶ瀬遺跡では、昭和55年度に兵庫県教育委員会が実施した西汐入川の発掘調査において、「大伴」と書かれた墨書土器が出土しており、聖徳太子によって揖保郡内の水田司に任じられた大伴連との関連が指摘されている。



1　丁・柳ヶ瀬遺跡　2　瓢塚古墳　3　下太田廃寺　4　ツクワ遺跡　5　川島遺跡　6　大津茂川床遺跡
7　檀特山山頂遺跡　8　下太田遺跡　9　檀特山遺跡　10　檀特山3号墳　11　檀特山1号墳　12　朝日山1号墳～3号墳
13　朝日山城跡　14　朝日山遺跡　15　和久遺跡　16　茶屋遺跡　17　山戸遺跡　18　南山戸遺跡　19　山戸4号墳
20　山戸1号墳～18号墳墳　21　勝山町古墳群1号墳～5号墳　22　丁山頂古墳　23　丁古墳群1号墳～5号墳　24　薬師古墳

図１　調査地の位置と周辺の遺跡

第２章 調査の成果

１．調査の概要

本発掘調査は、開発区域の北側、東側及び西側の一部の擁壁(総延長114.7m）に加え、下水道敷設工事の範囲（延長67.5m）を対象とした。調査面積は、268.84㎡である。調査箇所が大きく2ヶ所に分かれるため、北西側を1区、南東側を2区とした。

調査地の基本層序は、北端が微高地の縁辺部にあたり、耕作土、床土を経て現況から約30㎝で遺構検出面に達する。しかし、南に向かって地形が低くなり、北端で遺構検出面であった基盤層は、南へ約8m付近から急激に検出レベルが下がっていく(図３)。2区南端のほうでは、弥生時代から古墳時代の遺構と中世の遺構の検出面に20㎝の高低差があり、北端に比べて不安定な土地環境であったことが推測される。しかしながら、遺構は調査区のほぼ全域に分布し、竪穴建物跡2基、ピット99基（この中から掘立柱建物跡３棟分が抽出できた）、井戸1基、溝5条を検出した(図２)。

写真１　調査対象範囲　南西から

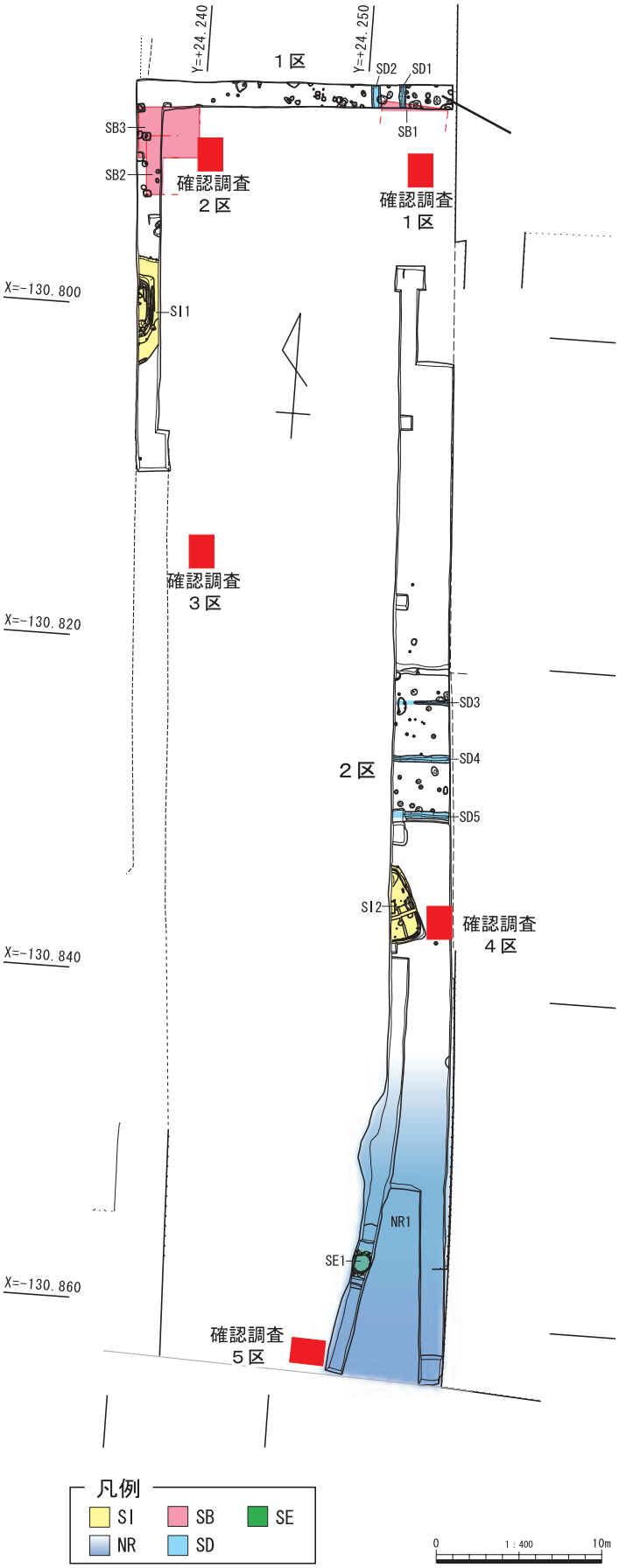
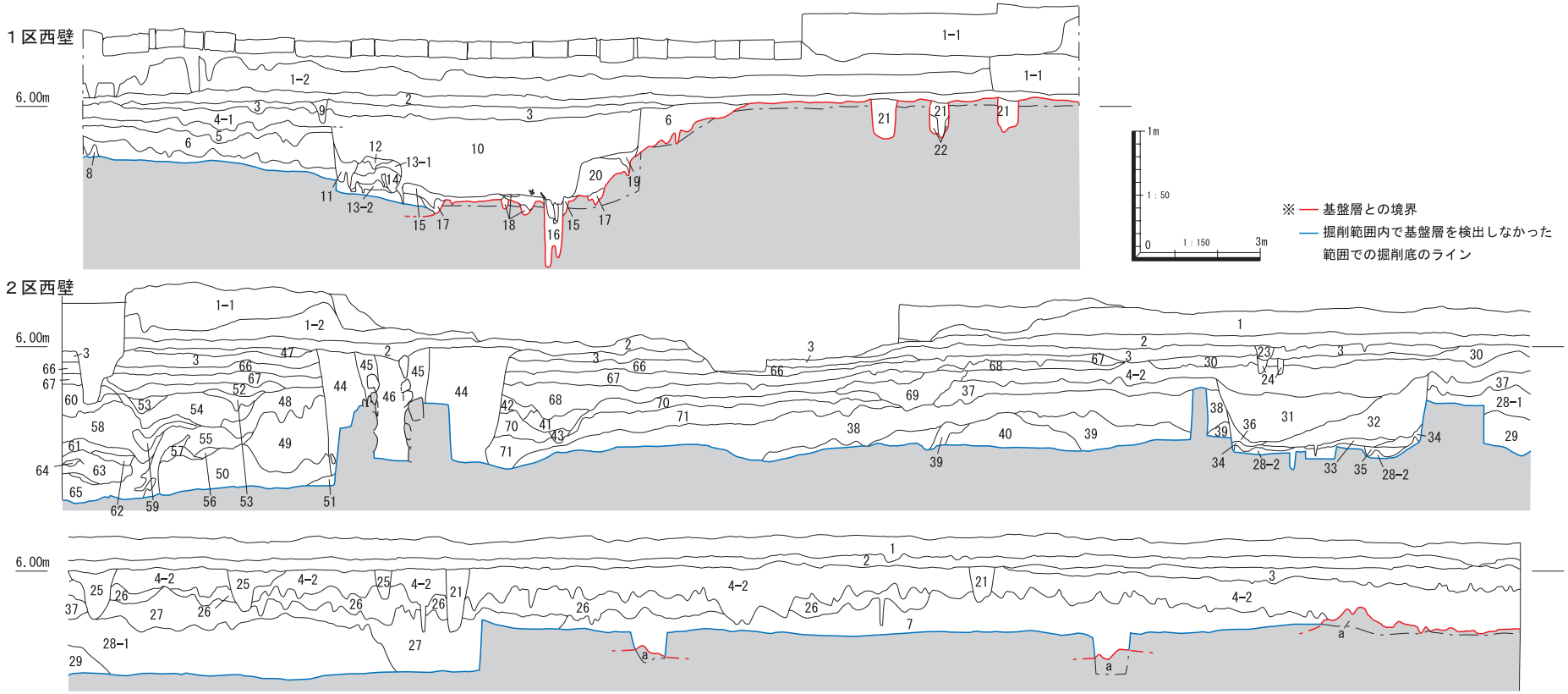


図２　調査区全体図　S=1:400



1-1. 盛土
1-2. 耕作土
2. 10YR7/1～6/1シルト混じり中砂→床土
3. 10YR5/1～5/2シルト混じり細砂～中砂
4-1. 10YR3/2細砂混じりシルト→1区の堆積層
4-2. 10YR3/2細砂混じりシルト→2区の堆積層
5. 10YR5/2～4/2細砂混じりシルト
6. 10YR4/2シルト混じり細砂～中砂
7. 10YR4/2～4/3シルト混じり細砂
8. 10YR5/4～6/6シルト混じり細砂
9. 10YR5/1～5/2シルト混じり細砂～中砂
10. 10YR2/2シルト　細砂含む
層の下方に10YR5/4～6/6ブロック微量、
炭片、焼土片、遺物混じる→SI1埋土
11. 10YR3/2細砂混じりシルトブロック＋
10YR5/4～6/6シルト混じり細砂ブロック
(割合8:2)→SI1高床部埋土
12. 11層と同様（割合7:3)→SI1高床部埋土
13. 11層と同様（割合3:7)→SI1高床部埋土
14. 11層と同様（割合7:3)→SI1高床部埋土
15. 11層と同様（割合4:6)→SI1中央部貼床埋土
16. 11層と同様（割合1:1)→SI1-SP　埋土
17. 11層と同様（割合2:8)→SI1高床部埋土
18. 10YR3/2砂混じりシルト→SI1貼床下層埋土
19. 11層と同様（割合8:2)→SI1周溝埋土
20. 11層と同様→SI1高床部埋土
21. 10YR3/1～2/1シルト混じり細砂＋
10YR5/4～6/6シルト混じり細砂少量→SP埋土
22. 10YR5/4～6/6シルト混じり細砂＋
10YR3/1～2/1シルト混じり細砂→SP埋土
23. 10YR5/1～5/2シルト混じり細砂→SP埋土
24. 10YR5/1～5/2シルト混じり細砂～中砂ブロック
＋10YR3/2細砂混じりシルト→SP埋土
25. 10YR6/1～5/1シルト混じり細砂～中砂→SD埋土
26. 10YR4/3シルト混じり細砂～中砂
27. 10YR5/4～6/6シルト混じり細砂
28-1. 10YR4/2シルト混じり砂質土
28-2. 10YR4/2シルト混じり砂質土
28-1よりシルトが多い
29. 10YR4/2～3/シルト混じり砂礫　小礫、粗砂が多い
30. 10YR4/2～3/シルト混じり細砂ブロック、
31. 10YR3/2～2/2シルト混じり細砂
10YR4/2シルト混じり砂質土ブロック、炭片、
遺物混じる→SI2埋土
32. 31と同様→SI2埋土
31層との境界に暗い色の土が集中
33. 2.5Y3/2シルト混じり細砂ブロック
＋10YR4/2シルト混じり砂質土ブロック(割合1:1)→SI2貼床埋土
34. 33と同様(割合4:1)→SI2周溝埋土
35. 33と同様（割合2:3)　しまり良い　→SI2貼床下層埋土
36. 10YR3/2～2/2細砂混じりシルト　炭片、遺物混→SI2埋土
37. 10YR3/2シルト混じり細砂　4層より明るく粘度が強い
38. 10YR2/2シルト混じり細砂
39. 10YR3/3砂＋シルト(割合1:1)
40. 10YR4/1砂礫
38. 10YR2/2シルト混じり細砂
39. 10YR3/3砂＋シルト(割合1:1)
40. 10YR4/1砂礫
41. 10YR4/1～4/2シルト混じり砂質土
42. 10YR4/1～4/2砂混じりシルト　68層より砂粒多く明るい
43. 10YR4/2～3/2シルト混じり細砂　粗砂多く含む
44. 10YR2/1砂混じりシルト　3,14,15,16,42,19,20層の
土がブロック状に混じる→SE1掘方埋土
45. 10YR5/1シルト混じり細砂→SE1石組み裏込め埋土
46. 10YR5/2シルト混じり細砂
47. 10YR5/1～5/2シルト混じり細砂～中砂
3層との境界にマンガンが集中する
48. 10YR4/1～4/2砂混じりシルト
49. 10YR4/2～3/2シルト混じり細砂　砂粒　礫混じる
50. 10YR4/1～3/1砂混じりシルト
51. 10YR2/1粘質土　19層
52. 10YR4/1～4/2細砂混じりシルト
53. 10YR3/1砂混じりシルト
54. 10YR4/1砂　シルトが微量混じる
55. 10YR4/1砂　54層より砂粒が細かい
56. 10YR5/2粗砂
57. 10YR4/1砂混じりシルト
58. 10YR4/2～3/2粗砂混じりシルト
59. 10YR4/1～4/2砂
60. 10YR4/1～3/1砂混じり粘質土
61. 10YR4/2～3/2粗砂混じりシルト　有機物混じる
62. 10YR4/1シルト混じり粗砂
63. 10YR5/3粘質土
64. 10YR5/3シルト+砂(割合1:1)
65. 10YR4/1～3/1砂混じり粘質土
66. 10YR4/1シルト混じり細砂～中砂
67. 10YR4/1～3/1細砂混じりシルト
68. 10YR4/1～4/2砂混じりシルト
69. 10YR3/1～3/2シルト混じり細砂　遺物を含む砂層が間に混入
70. 10YR4/2～3/2シルト混じり細砂
71. 10YR4/2～4/3砂混じりシルト
a. 10YR5/4～6/6シルト混じり細砂　しまり良い→基盤層

図３　１区西壁、２区西壁　断面図

２．弥生時代から古墳時代の遺構

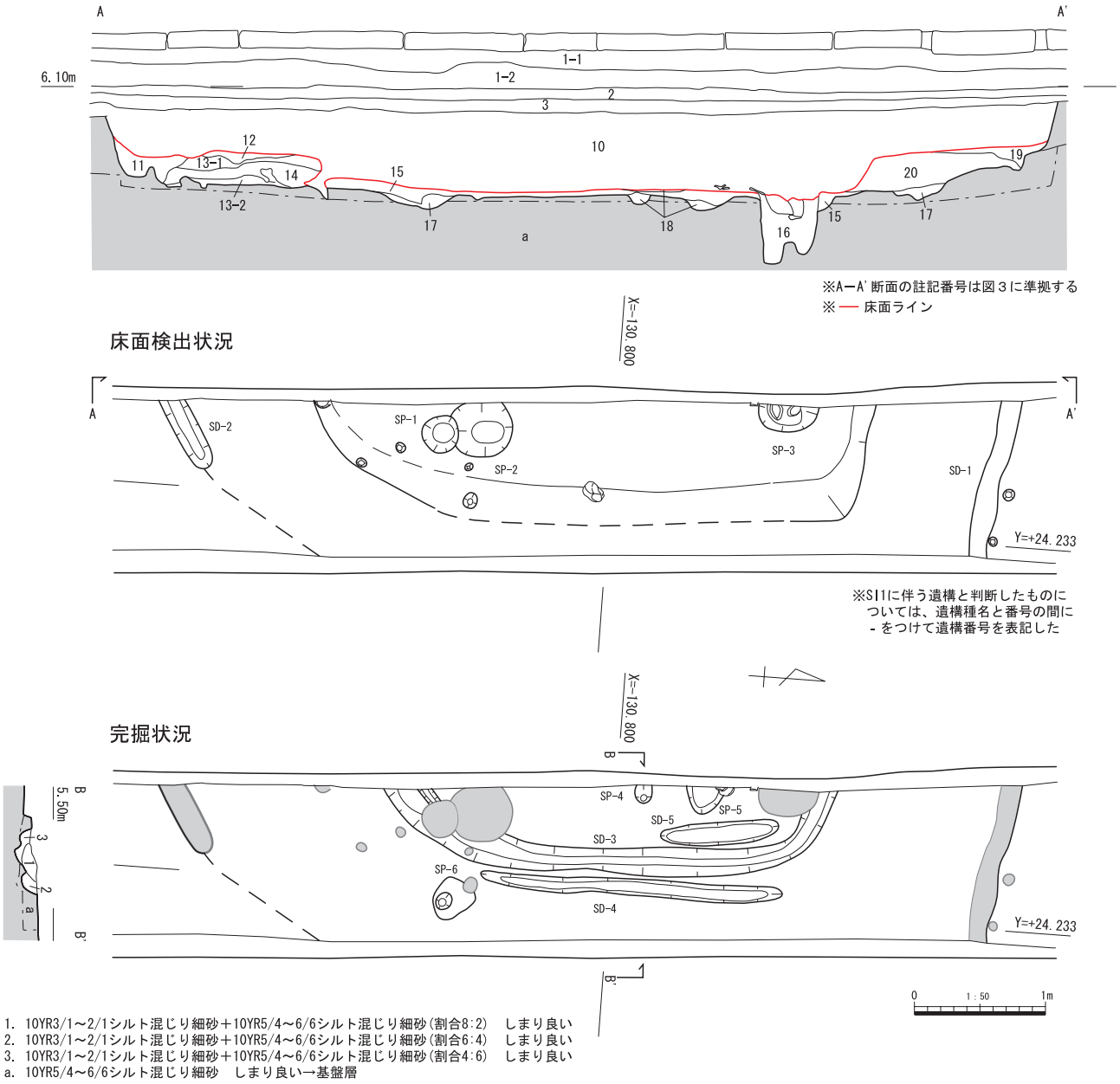
(1) 竪穴建物跡　SI1

1区南西で検出した。検出面のレベルは標高約6.0mである。

調査範囲が狭小であるため、全体のプランは不明であるが、調査範囲内からは隅円方形ないし五角形の平面プランが想定される。検出した範囲内での規模は、幅1.2m、長さ6.6mを測る。周壁に沿って幅0.2mの周壁溝及び、幅1m、高さ0.2m前後の高床部がめぐる。高床部は盛土で構築されていた。また中央の床面には全面に厚さ5cm程の貼床が施されていた（図４）。

貼床及び、高床部盛土の下層からは、高床部のプランに並行して2条の溝を検出した。これらの溝は切り合いがあることから、高床部の補修をおこなっていた可能性も考えられる。

SI1の時期は、出土遺物から弥生時代末～庄内式期に比定される(図５)。



1. 10YR3/1～2/1シルト混じり細砂＋10YR5/4～6/6シルト混じり細砂(割合8:2)　しまり良い
2. 10YR3/1～2/1シルト混じり細砂＋10YR5/4～6/6シルト混じり細砂(割合6:4)　しまり良い
3. 10YR3/1～2/1シルト混じり細砂＋10YR5/4～6/6シルト混じり細砂(割合4:6)　しまり良い
a. 10YR5/4～6/6シルト混じり細砂　しまり良い→基盤層

図４　SI1　平・断面図

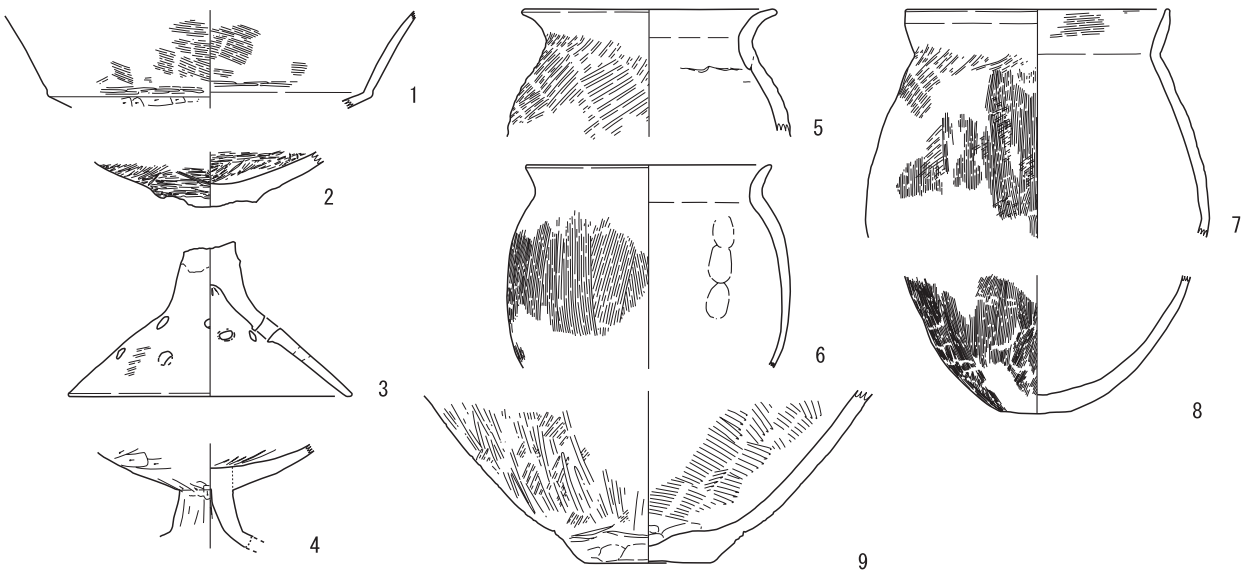


図５　SI1　遺物実測図　S=1:4

0　1：4　10cm

番号	種別	器種	区名	出土遺構	口径	底径	器高	色調(外)	色調(内)	焼成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考
1	土師器 (庄内式期)	有稜 高杯	1区	SI1	－	－	(4.9)	10YR5/2	10YR5/2	良好	φ0.5mm 弱の細かい白色粒を少量含む	杯部体部1/8	横ナデ様のミガキ	横ナデ様のミガキ	床面出土　B系統か 反転復元
2	土師器 (庄内式期)	高杯	1区	SI1	－	－	(2.9)	7.5YR7/4	10YR8/3	良好	φ3～5mmの褐色粒少 φ3mm以下の砂粒含む	杯部の底部	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	床面出土　B系統か 反転復元
3	土師器 (庄内式期)	高杯	1区	SI1	－	14.6	8.2	10YR7/3	10YR7/3	やや 軟質	φ1～3mm の砂粒を多く含む	脚柱部 完存 底部脚端部は1/8	タタキ→ナデ	ナデ	床面、10層目出土　　P形の透かし 2段、各8ヶ所(推定)　底部脚端部は反転復元
4	土師器 (庄内式期)	高杯	1区	SI1	－	－	(5.55)	10YR7/3	10YR7/4	やや 軟質	φ0.5～1mm の砂粒を多く含む	ほぼ脚柱部のみ	杯部ナデ→一部ケズリ 脚部ミガキ	杯部ミガキ 脚部ナデ	床面出土　B系統か　杯部反転復元
5	土師器 (庄内式期)	甕	1区	SI1	13.1	－	(6.7)	10YR7/3	10YR7/3	やや 軟質	φ0.5～3mm の白色粒を含む	口縁部1/5	口縁部横ナデ 体部タタキ	口縁部横ナデ 体部縦ナデ	床面、10層目出土 外面の一部にススが付着　反転復元
6	土師器 (庄内式期)	甕	1区	SI1	12.9	－	(10.7)	7.5YR7/6	2.5Y8/2	やや 軟質	φ1～3mmの白色粒を含む	口縁部1/8 体部上方	口縁部横ナデ 体部縦ハケ	横ナデ 指オサエ痕跡	床面出土　外面ハケメの下にタタキ痕跡あり 外面にススが付着　反転復元
7	土師器 (庄内式期)	甕	1区	SI1	－	3.7	(7.3)	2.5YR7/6	10YR6/3	やや 軟質	φ1～2mmの白色粒含む	底部、体部下方	タタキ→縦ハケ	板状工具による 縦ナデ	10層目出土 外面の一部にススが付着
8	土師器 (庄内式期)	甕	1区	SI1	13.6	－	(12.0)	7.5YR7/6	10YR8/4	やや 軟質	φ1～2mmの砂粒を含む	口縁部1/4	口縁横ナデ 体部タタキ→縦ハケ	板状工具による 縦ナデ	床面出土 反転復元
9	土師器 (庄内式期)	壺	1区	SI1	－	6.8	(9.1)	10YR8/3	10YR8/4	やや 軟質	φ3mm以下の砂粒を含む	底部、体部下方	タタキ→ミガキ	ハケメ様のナデ	床面出土 反転復元

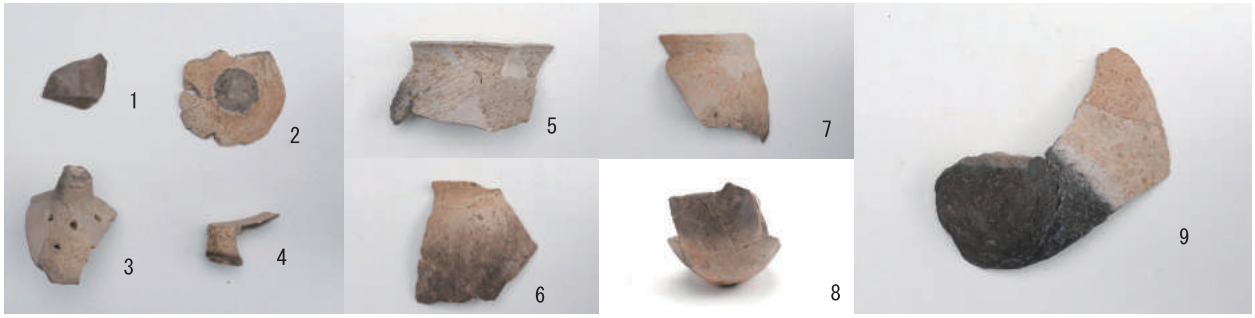
※口径・底径・器高の単位はcmである。（ ）内の数字は、残存値である

表1　SI1　遺物観察表

床面検出状況　北から

完掘状況　北から

断面（A－A'）南東から



※数字は実測番号に対応

写真２　SI1　遺構・遺物写真

(2)竪穴建物跡　SI2

2区中央において竪穴建物跡の南東部を検出した。多くの範囲が調査区外に位置しており、かまどなどの燃焼施設は不明である。建物の規模は、確認できた範囲で南北約4.5m、東西約2.1mを測り、平面プランは隅円方形を呈する。遺構面から床面までの深さは約0.2m、その下に厚さ約5～10cmの貼床が全面に施されていた。また、南東角に長さ1.9m、幅0.9mの高床部を検出した。床面との高低差は、約0.2mである。床面には幅約0.1m、深さ約0.06mの周壁溝が周囲にめぐらされていた。遺構の南東部分では、掘方の直径約0.3m、深さ約0.45mのやや楕円状の柱穴（SP-1）を検出した。建物に伴う柱と推察される。

SI2は、出土した土師器から庄内式期に相当する遺構と判断した(図7)。このうち、貼床直上で確認した土器(図6 №1、図7 14)は、壺の胴部に縦に半円形の櫛描コンパス文が2条連続して施されている。

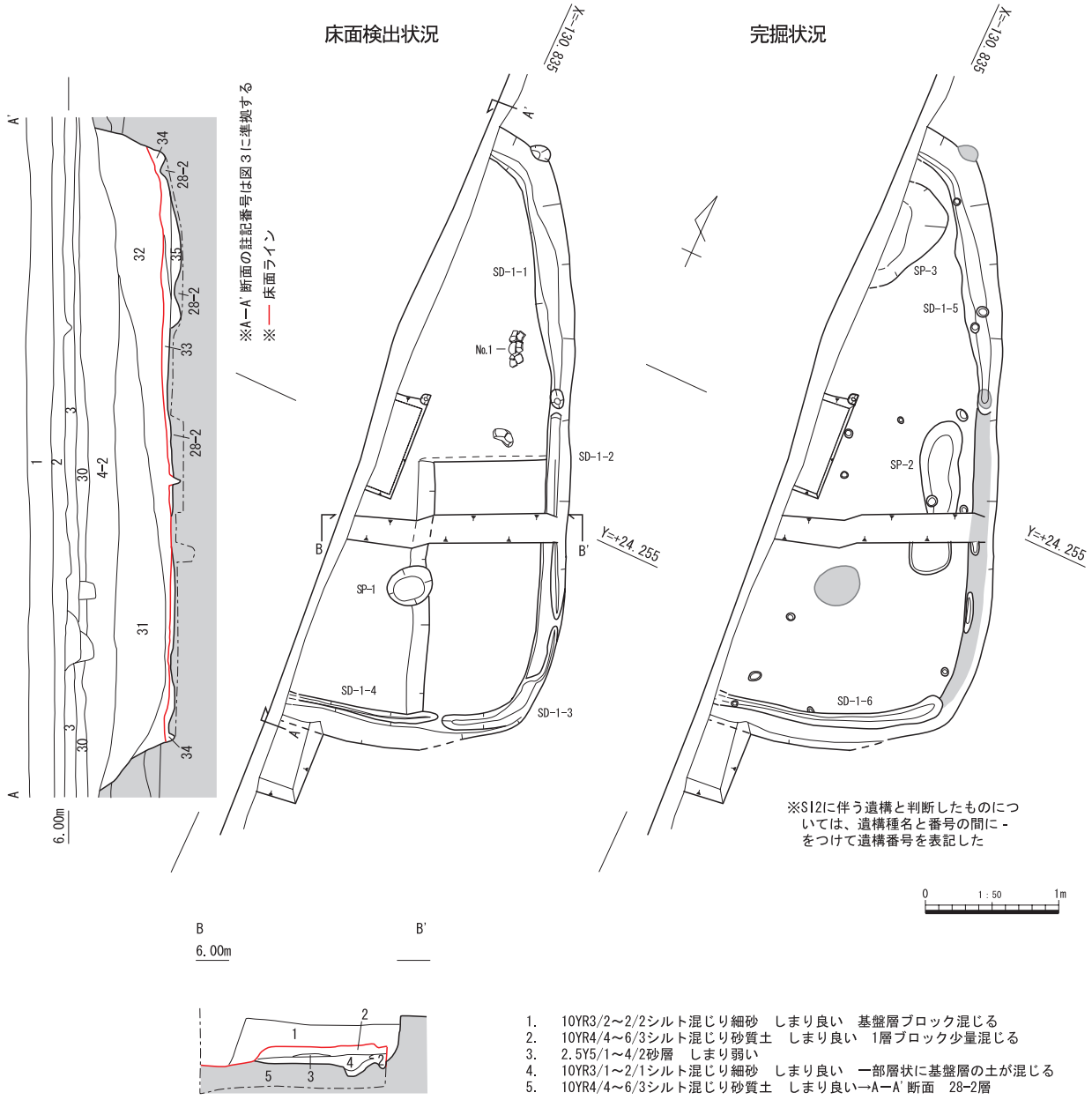


図6　SI2　平面図・断面図　S=1：50

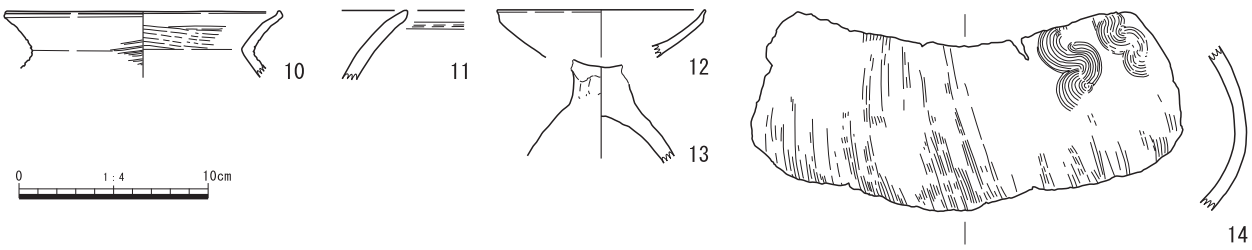


図７　SI2　遺物実測図　S=1:4

番号	種別	器種	区名	出土遺構	口径	底径	器高	色調(外)	色調(内)	焼成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考
10	土師器(庄内式期)	甕	2区	SI2	14.4	－	(3.0)	10YR7/3	7.5YR7/4	良好	φ4mm以下の砂粒を含む	口縁部から頸部	タタキ→ナデ	ナデ	反転復元
11	土師器(庄内式期)	壺	2区	SI2	－	－	(4.0)	10YR7/4	10YR8/3	良好	φ4mm以下の砂粒を含む	口縁端部の一部	横ナデ	横ナデ	
12	土師器(庄内式期)	小型器台	2区	SI2	11	－	(2.5)	10YR7/4	10YR7/3	良好	φ2～3mmの砂粒を多く含む	杯部1/8	ナデ	ナデ	口縁部のみ 反転復元
13	土師器(庄内式期)	小型器台	2区	SI2	－	－	(2.5)	10YR7/4	10YR7/3	良好	φ2～3mmの砂粒を多く含む	脚部上方2/3	ナデ	ナデ	脚部のみ 26-1 と接点はないが同一個体の可能性あり
14	土師器(庄内式期)	壺	2区	SI2	－	－	(8.7)	5YR7/8	5Y2/1	良好	φ2mm 前後の白色粒、灰色粒を多く含む	体部の一部	縦ハケ→横ナデ	横ナデ	土器No.1 肩部に10条を1単位とする櫛描きのコンパス文を縦方向に2列施す

※口径・底径・器高の単位はcmである。( )内の数字は、残存値である

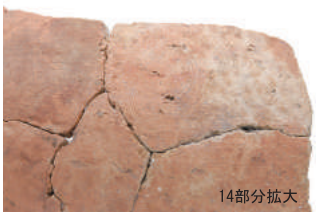
表２　SI2　遺物観察表

床面検出状況　南から

完掘状況　南から

断面（A－A'）　東から

断面（B－B'）　南から



※数字は実測番号に対応

写真３　SI2　遺構・遺物写真

(3)自然流路　NR1

2区の南端および、確認調査5区で検出した堆積層である。

2区では、1区の北端の遺構検出レベルである標高6.0mと比較して、遺構検出面のレベルが徐々に低くなり、不安定な様相に変化する。SI2付近での遺構検出面の高さは、約0.2m下がっていたが、そこから南側に向かってさらに低下し、弥生土器を包含する東西方向の細い溝状を呈する堆積層が現れる（図３ 69層）。

このあたりから南は、水分を多く含む粘質の強い土層が主体となり、調査区南端から11m付近より南では、、粘質土層の狭間にランダムに砂や砂礫が入る堆積状況がみられる。この砂層からまとまって出土した遺物の時期は、おおよそ庄内式期にあたることから、これらの堆積層は、古墳時代初頭頃に存在した自然流路の埋土である可能性が推測される(図８）。

なお、上層には古代の須恵器を包含している層が0.3m程度堆積しており、その上面からSE1が構築されている。

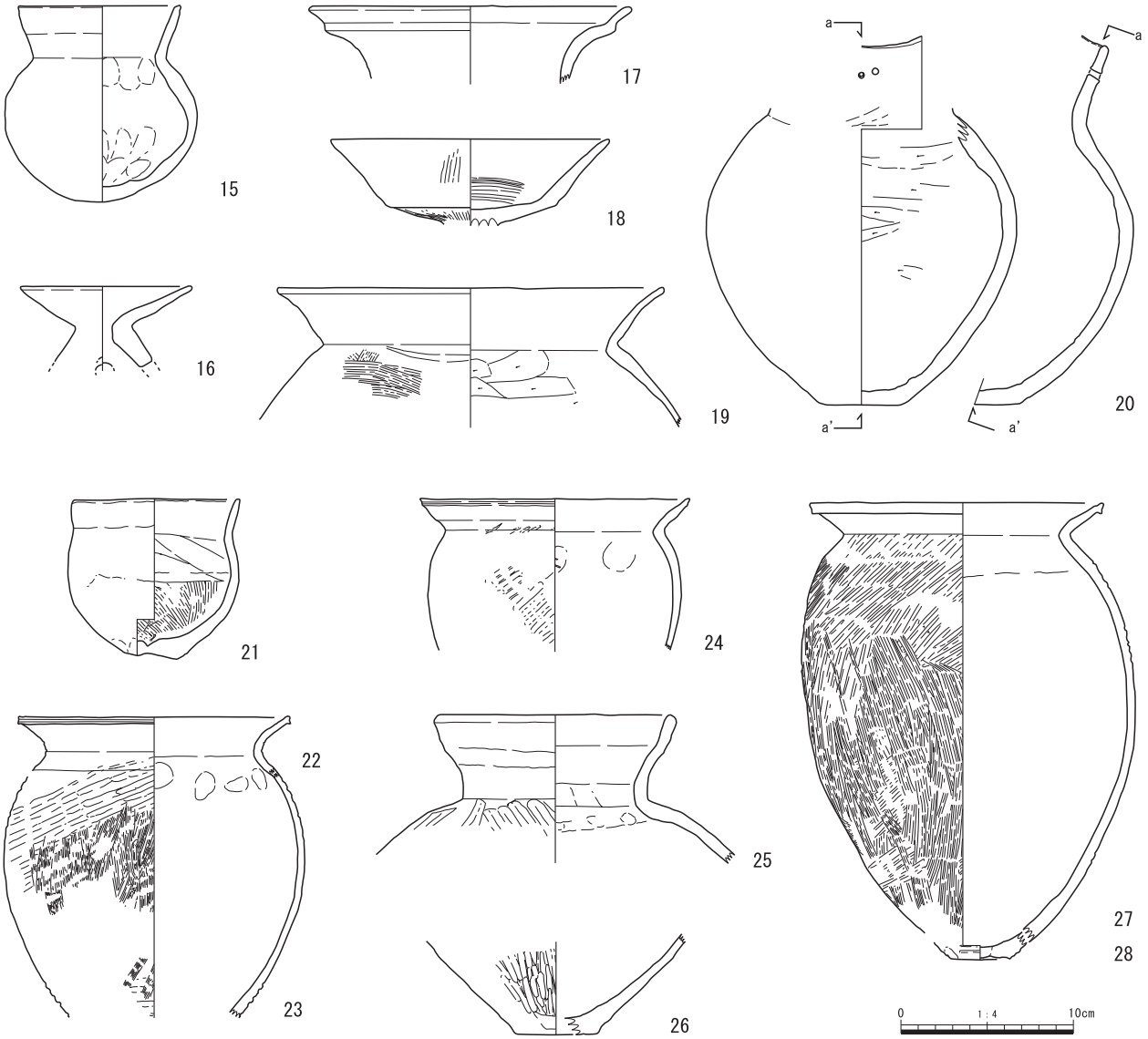


図８　NR1　遺物実測図　S=1：4　（15～20:2区、21～27:確認5区）

番号	種別	器種	区名	出土遺構	口径	底径	器高	色調(外)	色調(内)	焼成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考
15	土師器 (庄内式期)	小型 丸底壺	2区-23		9.3	0.0	11.3	7.5YR7/3	5YR7/4	良好	φ3mm 以下の砂粒を含む	口縁部から頸部の一部を欠く	板状工具による不定方向ナデ	指オサエ→板状工具による横ナデ	土器No.2 粗製品 外面一部にススス付着 口縁部反転復元
16	土師器 (庄内式期)	小型 器台	2区-2	22層	9.95	–	(4.9)	7.5YR8/4 10YR7/2	10YR8/3 10YR5/1	軟質	φ2mm 以下の白色粒、灰色粒を多く含む	杯部1/8 脚部上方	ナデ	ナデ	円形の透かし 4ヶ所(推定) 底部中部は反転復元
17	土師器 (庄内式期)	器台	2区-2	22層	18.7	–	(3.5)	2.5Y7/3	2.5Y8/3	良好	φ2mm 以下の白色粒、灰色粒を多く含む	口縁部1/8	横ナデ	横ナデ	反転復元
18	土師器 (庄内式期)	高杯	2区-23	下層	16.1	–	(5.1)	2.5Y8/2	10YR8/2	良好	φ2mm 以下の白色粒、灰色粒を多く含む	口縁部1/20 杯底部1/4	縦ハケ→横ナデ	横ハケ→横ナデ	ハケメはわずかに痕跡が残るのみ
19	土師器 (庄内式期)	甕	2区-23	下層	22.2	–	(8.1)	10YR8/3	10YR8/2	やや軟質	φ5mm 以下の砂粒を含む	口縁部から体部上方	口縁部横ナデ 体部縦ハケ→横ハケ	口縁部横ナデ 体部横方向ケズリ	庄内式甕 反転復元
20	土師器 (庄内式期)	壺	2区-3		–	21.4	4.2	2.5Y8/1	2.5Y8/1	良好	φ3mm 以下の砂粒を多く含む	口縁部の大部分が欠	ミガキ様のナデ (工具の単位不明)	口縁部横ナデ 体部横ケズリ	土器No.1 口縁部に片口があり、中央に2ヶ所の穿孔 内面のケズリは、板状工具の角が当たってケズリ状に見えている可能性あり
21	土師器 (庄内式期)	小型 丸底壺	確認 5区	土器溜り	9.65	3.0	9.3	7.5YR6/4	7.5YR7/3	良好	φ3mm 以下の砂粒を含む	口縁部から頸部の一部が欠	ナデ	体部下半放射状の細ハケ	粗製品、粘土紐の痕跡残る 外面底部、体部の一部にススス付着
22	土師器 (庄内式期)	甕	確認 5区	土器溜り	15.6	–	(17.5)	10YR7/2	10YR6/2	良好	φ7mm 以下の砂粒を多く含む	口縁部1/8	口縁部横ナデ 体部タタキ→縦ハケ	板状工具による ナデ	反転復元
23	土師器 (庄内式期)	甕	確認 5区	土器溜り	15.6	–	(17.5)	10YR7/2	10YR6/2	良好	φ7mm 以下の砂粒を多く含む	体部1/4	口縁部横ナデ 体部タタキ→縦ハケ	板状工具による ナデ	反転復元 外面の一部にススス付着 4-1と接点はないが同一個体の可能性あり
24	土師器 (庄内式期)	甕	確認 5区	土器溜り	15.6		(8.8)	5YR7/6	7.5YR8/3	良好	φ2mm 以下の砂粒を含む	口縁部から体部1/6	口縁部横ナデ 体部タタキ	ナデ	外面にススス付着 反転復元
25	土師器 (庄内式期)	壺	確認 5区	土器溜り	13.6	–	(8.5)	10YR8/3	10YR8/2	良好	φ6mm 以下の砂粒を多く含む	口縁部1/4	口縁部～頸部横ナデ 体部ミガキ	口縁部、体部:横ナデ 頸部:縦ナデ	反転復元
26	土師器 (庄内式期)	壺	確認5区	土器溜り	–	4.8	–	10YR8/3	10YR8/2	良好	φ6mm 以下の砂粒を多く含む	底部1/4	ミガキ	ナデ	3-1と接点はないが同一個体の可能性あり
27	土師器 (庄内式期)	甕	確認5区	土器溜り	16.9	–	(24.8)	5YR7/6	7.5YR7/3	良好	φ7mm 大の砂粒を少量含む	口縁部1/3 体部4/5	口縁部横ナデ 体部タタキ→縦ハケ	横ナデ	5-1と明確な接点はないが同一個体の可能性が極めて高い
28	土師器 (庄内式期)	甕	確認 5区	土器溜り	–	3.4	(1.6)	5YR7/6	7.5YR7/3	良好	φ7mm 大の砂粒を少量含む	底部1/2	口縁部横ナデ 体部タタキ→縦ハケ	横ナデ	外面の一部にススス付着

※口径・底径・器高の単位はcmである。( )内の数字は、残存値である

表３　NR1　遺物観察表

SR1付近 北から　　遺物出土状況

確認5区　北から　　遺物出土状況

2区南端　NR1　断面

※数字は実測番号に対応

写真４　NR1　遺構・遺物写真

３．古代の遺構

(1) 掘立柱建物跡　SB1

1区の東端で二間分を検出した。柱の並びが調査区外へ延びているため、全体の規模は不明である。掘方は一辺60cm～70cmを測り、形状は不整形であるものの方形を指向する。柱根の痕跡が不明瞭であるため、柱径等は確認できなかった。建物の南北主軸は、N-9°-Wをとる。遺構の時期は、遺物が出土していないため特定できない。

(2) 掘建柱建物跡　SB2

1区の北西部で二間分を検出した。柱の並びが調査区外へ延びているため、全体の規模は不明である。掘方は一辺35cm～50cmを測り、形状は方形を指向する。建物の主軸は、N-4°-Wをとる。遺構の時期については、遺物がほとんど出土しなかったため特定できない。

(3) 掘建柱建物跡　SB3

1区の北西部で東西二間、南北二間分を検出した。柱の並びが調査区外へ延びているため、全体の規模は不明である。掘方は一辺45cm～55cmを測り、形状は方形を指向する。建物の主軸は、N-4°-Wをとる。遺構の時期については、SP51の掘方から出土した遺物から7世紀以降の時期があてられるが、小片のため特定は困難である。

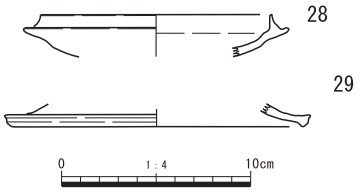


図９　SB3　遺物実測図　S=1:4

番号	種別	器種	区名	出土遺構	口径	底径	器高	色調(外)	色調(内)	焼成	胎土	残存状況	調整(外)	調整(内)	備考
29	須恵器	杯身	1区	SB3(SP51)	12.1	－	(2.2)	N6/	N7/	良好	φ1mmの細かい白色粒を含む	口縁部1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元
30	須恵器	高杯	1区	SB3(SP51)	－	15.4	(1.2)	N6/	N5/～N6/	良好	φ1mmの細かい白色粒をわずかに含む	脚部付部の一部	ロクロナデ	ロクロナデ	反転復元

※口径・底径・器高の単位はcmである。（ ）内の数字は、残存値である

表４　SB3　遺物観察表

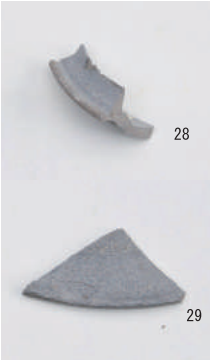
SB1　東から

SB2　北から

SB3　東から

SP8断面　北から

SP51断面　東から



※数字は実測番号に対応

写真５　SB1～3　遺構・遺物写真

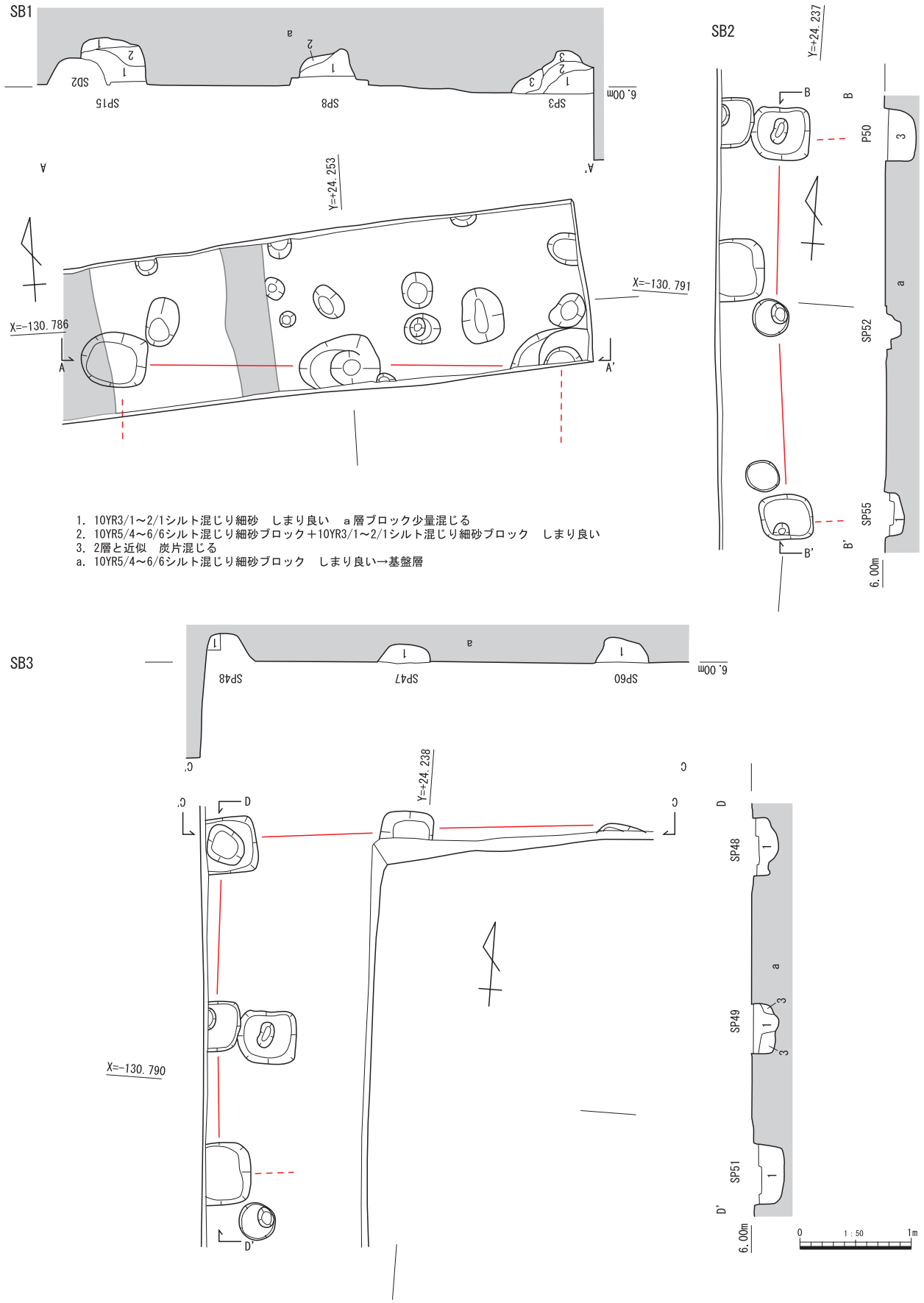


図10　SB1～3　平・断面図　S=1:50

４．中世の遺構

(1)　井戸　SE1

2区の南側で検出した遺構である。直径1.05m、調査区西壁で観察した掘方の最大幅は5.0mを測る（図３）。深さは0.8mまでを調査し、それより下層については工事の影響が及ばないため、現地保存とした。

井側に拳大から人頭大程度の割石を用いた石組み井戸である。出土遺物がなかったため詳細は不明であるが、SR1の上層に堆積した古代の須恵器を含む土層を切って構築されていることや、井戸の形状から平安時代末から、鎌倉時代頃の遺構であると推察される。

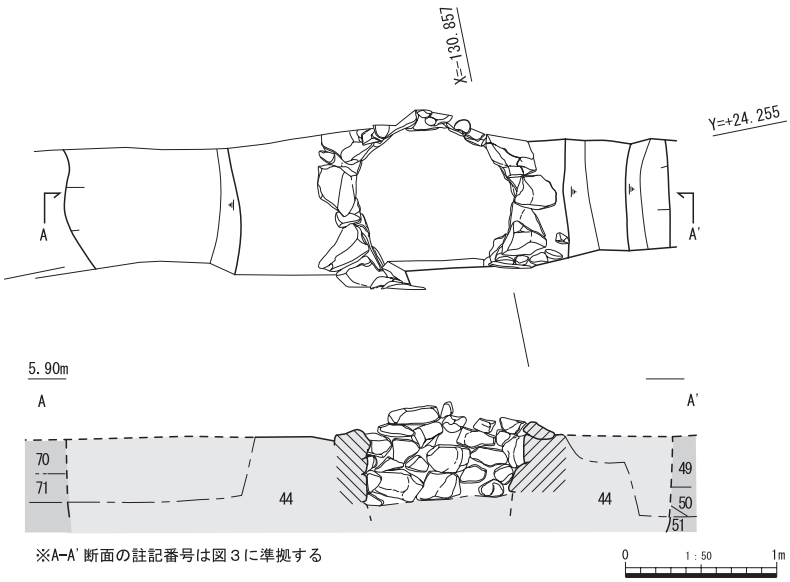


図11　SE1　平面図・断面見通し図　S=1:50

写真６　SE1

(2) 溝　SD1～5

SD1、2は1区で検出した南北方向の溝である。規模は、SD1が幅0.3m・深さ0.1m、SD2が幅0.55m・深さ0.28mを測る。

SD3～5は、2区で検出した東西方向の溝である。SD3は幅0.4m・深さ0.2m、SD4は最大幅1.25m・深さ0.3m、SD5は最大幅1.15m・深さ0.38mを測る。埋土は、全て10YR5/1～6/1シルト混じり細砂である。

出土遺物が細片のため時期の特定は困難であるが、全ての溝がこの付近の条里地割りの方向である、N-4°-Wを主軸とするか、直交している。このことから、この地域の条里地割りが完成したとされる、12世紀以降の水田耕作に伴う溝である可能性が高い。

第３章　総括

今回の調査では、弥生時代～古墳時代の竪穴建物跡、古代とみられる掘立柱建物跡、中世の井戸などを確認した。

遺構の時期、構成については、丁･柳ヶ瀬遺跡の既存調査の成果を踏襲する内容であった。しかし、遺跡の北端での遺構の分布状況の一端が明らかとなった。

また、微高地の縁辺部での調査であったことから、付近の古環境や、遺跡内での遺構の立地環境ををうかがい知る情報が得られた。

1区　北側（東から）

1区　西側（南から）

2区（北から）

2区 南側（北から）

写真７　調査区全景

報告書抄録

ふりがな	よろ・やながせいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	丁･柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第22集
編著者名	小柴 治子・関　梓
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1　TEL（079）252-3950
発行年月日	平成26年（2014年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よろ・やながせいせき 丁･柳ヶ瀬遺跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 かつはらくよろあざどうがいち 勝原区丁字堂垣内 451番1　他	28201	020327	34° 82′ 07″	134° 59′ 83″	2013.9.30 ～ 2013.10.19	268.84 ㎡	宅地 造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
丁･柳ヶ瀬遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	竪穴建物跡、河道	土師器	20130282
		古　代	掘立柱建物跡	須恵器、土師器	
		中　世	溝、ピット、井戸	須恵器、土師器	

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第22集

丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書

発　行　日　平成26年（2014年）3月31日

編　集　姫路市埋蔵文化財センター　〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1

発　行　姫路市教育委員会　〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷　〒671-0218　兵庫県姫路市飾東町庄57-2